

《鎌倉の起こり》

正嘉年間（1257～59）に北条時頼が諸国行脚の折、この地に来てしばらく滞在していたという言い伝えがあるので、中世以前に開けた村落かと思われる。（山田村村史より）

《地名の言われ》

康元元年（1256）6月に北条時頼が諸国を行脚中にこの村に立ち寄り、向い原という地に立って見降ろすと富山平野が相模湾に似ており、他の方を見ても故郷の鎌倉に似ていることから「鎌倉」と名づけられた。尚、同時に、山田川の向こうの山を「烏が森」、背面の山を「日高山」と名づけた。（山田村郷土史より）

《面積・田畑》

明治18年1月	水田	331a	畑	1882a	宅地	81a	山林原野	1761a
平成25年1月	水田	599a						

《人口推移》

年号	年	西 暦	戸 数	人 口	内、男性	内、女性
慶 應	5	1868	22	115	65	50
明 治	18	1885	23	132	65	67
昭 和	55	1980	17	81	41	40
平 成	25	2013	12	42	20	22

《産業》

米（コシヒカリ）主体の兼業農家 鎌倉営農組合
平成22年より「マコモタケ」を栽培

「山田紙（やまだかみ）」……延宝の初め（1673～）富山藩2代目藩主正〇が「反魂丹」を中心とした和漢薬の売薬業を広めた。薬の保存の為の強靱な和紙を必要とし、この地の和紙を「山田紙」といい、昭和8年ごろまで重宝がられた

《山田谷鎌倉村の由来》

正嘉年間（1257～59）に北条時頼が諸国行脚の折、 当地に来られ暫く御逗留された。御宿は田中八郎兵衛の家であった。その頃はこの地に家数3軒であったが、時頼公の御仁愛により12軒となった。そして、時頼公この地を離れんとされると村人たちが皆御名残惜しいと申し上げた。時頼公は不愜に思われ又暫く滞在された滞在された。その間に長さ一尺、幅一尺二寸の石をもって人の像を彫られ、この像を我が身と思えと仰られた。又、この地に来た記念にと樅の木を植えて出立なされた。世話方の善右衛門と申す者が近辺者より奉加を頼み、越中の国第一の御堂を奉り、その石像を安置し朝夕お守を続けた。

善右衛門ある夜御堂が焼失する夢を見、より厳重に見守るもある日御堂はことごとく焼失してしまった。それ以降、その御堂の近くを馬に乗って通ると必ず落馬するようになった。それゆえ、この下の坂を馬切坂という。

その後、榎の木の丸に安置し時頼公御自作の石地蔵としてお守り続け、故にこの地を鎌倉村と申すなり。（山田村村史より）

《山田男・白滝姫伝説》

この伝説は柳田国夫監修「日本昔話名集」に完形昔話の部、幸福な結婚の類型に「山田白滝」として取り上げられている。しかし、鎌倉地区のごとき公卿の姫君と結婚するのは異色で、一般的には金持ちの娘との結婚話です。

今から約800年ほど前（鎌倉三代1203～1219）、山田鎌倉、現在の田中正治氏の遠い祖先に二人の兄弟がありました。兄は当然ながら家を継ぎこの地にすみましたが、弟は志を立て京都に出てお公卿に使えました。元より利発の男なれば「山田男よ」「山田男よ」と皆に愛されました。

ある日のこと、湯殿の湯を沸かし湯加減もよろしいとその旨を公卿の娘白滝姫（三女）二申し上げました。姫は湯殿に来、湯加減を試されたところ少々厚かったので、山田男に「水を持って」と仰せられま山田男は早速かきこまって手桶の水を持ち湯壺へ注ごうとした時、いかなるはずみか手桶の水が媛がお召の袖にかかってしまいました。この時、田舎者とはいえ誠実な山田男にほのぼのとしたものを感じていた白滝姫は後ろ向きに振り向きざまに歌をお詠みになりました。

「霞(かすみ)さえ かかりかねたる 白滝に 心かけるな 山田男よ」

このような高貴な公卿の娘とはいえ、日頃から白滝姫に淡い慕情を抱いていた山田男は、すかさず

「照り照りて 苗の下葉の 枯れる時、山田に落ちよ 白滝の水」

と歌でお返ししました。

この有様を一部始終陰できいていた白滝姫野父親は、二人の成り行きを察し、山田男に「媛を汝に嫁として与えるから、媛を連れて故郷へ帰れ」とお言いつけになりました。一方、白滝姫も遠い北国での暮らしをご承知になりました。この時代は公卿と一般の人との結び合いは国外追放という厳しい掟がありました。せっかく志を立てて京に上った山田男でしたが、掟に逆らう訳にもいかず仕方なく故郷へ帰ることにしました。

しかし二人の足取りは軽く、途中敦賀より放生津までの水路、放生津から山田への陸路、長の道中もつつがなく家に帰りました。出発の際、嫁入り道具は勿論のこと、母君より形見に黄金造りの合わせ鏡を送られました。

山田男は姫との成り行きを家の者に詳細に説明しました。家の者達は大変驚いて、そのような高貴な同居するのは恐れ多しと、川向うの山（向い原鏡が窪）に新居を築いて兩人を住ませました。二人はここで生涯中睦まじく過ごされました。（山田郷土史より）

《鏡の宮の縁起》（白滝姫伝説のその後）

その22～23代後の田中家で。東の空より太陽が昇り向い原を照らす頃になると、川向いの山田男と白滝姫の屋敷跡より、どんどこどんどこと神楽囃子が聞こえてきました。初めの内は何とも思っていませんでしたが、あくる日もあくる日も聞こえてきました。不思議に思った当主はふと白滝紐の事を思い出し、これは確かにこれは確かに姫の親の形見の黄金の合わせ鏡が土に埋もれているに違いないと村中で屋敷跡を掘り起こしました。しかしとうとう鏡を見つけることはできませんでした。

今を去ること凡そ200年前、蓮華寺村の九郎右エ門なる者に夢のお告げがあったとういことで、当時の田中家の当主八郎兵衛を訪ねてきました。そして、古い祖先が建て春秋2回祭礼を行ってきたという祠(ほこら)の境内より一面の鏡を掘り出して行きました。（現在の外輪野用水の守護神となっています）

又もう一面は明治18年9月、八郎兵衛の希望により鎌倉の人々により祠の大門を拡げる作業をしておりました。中川善右衛門、杉林円四郎と一緒に茅株を起こそうと打ち込んだ桑先にカチンと金音がし、不思議に思い土を除くと一面の鏡が出てきました。善右衛門がすぐに八郎兵衛を呼びました。八郎兵衛は鏡を手に取りおし頂き「これこそ伝え言う先祖の宝鏡に違いない」と、直ちにほ祠にまつり一同で礼拝しました。その後、鏡の宮は遠方にて参拜困難ゆえ氏子八幡宮に合祀されました。鏡の宮跡には石碑が建ててあります。(山田郷土史より)

《地名のいわれ異聞》

「山田男と白滝姫伝説異聞」もあります。その中で山田男が奉公したのは現在の神奈川県鎌倉市であり、武家に奉公したとあります。そして山田男は大変な美男子で有り姫と恋をしたとされており、名誉ある武家としては奉公人と姫を近辺に置くことを避け、男の故郷山田郷へ多大なる支度で送り届けられました。そしてこの地を鎌倉と名づけたというものです。(山田村史より)

《焼け残りの名号》

田東砺波郡井波町の又八と称する家に、蓮如上人直筆の九字十字御対幅の御仏がありました。宝暦3年(1753)の暮、井波町大火の折、又八が別院でお手伝い中に自家が全焼しました。御仏を出す暇も無く又八は大変悲しみました。間もなく井波町の杉谷山と称する所の松ノ木に仏様のようなものが懸っているとの知らせがありました。又八が心ある人々と杉谷山へ行ってみると、松ノ木に懸っているのは間違いなく御仏でした。紙は焼けて御字だけであったが、又八は喜んで戴き帰り表具師に表具を頼みました。その時同町に鱒屋新右エ門という人の夢のお告げに、10歳ほどの小僧が訪ねて来て「長々貴家に入りにしている鎌倉村の八郎兵衛方へ行きたい故お世話を願いたい」とありました。又、今春他家へ嫁いだ鱒屋の娘あそにも同じお告げがありました。鱒屋としては親子ともにお告げあるのは打棄置けず、蓮如上人の御仏のご意思ではないかと、又八方を訪ね話されました。そして直ぐに鎌倉村八郎兵衛方へ飛脚を差し立て呼び寄せました。関係者一同詮議の上、表装出来た御仏と共に又八と鱒屋の名代として娘あそが、八郎兵衛共々鎌倉へ来られました。その時井波の信者の方々は、今の梅檀野のあたりまで見送りに来たということです。時は宝暦3年12月21日のことです。それより今日まで田中家に安置されています。(添書あり)(山田郷土史より)

《田中八郎兵衛・大蛇退治》

天保6年(1836)5月25日の朝、鎌倉の田中八郎兵衛が水田の水を見回って帰ってみると、座敷の外かえら二階のあまにかけて松の木が立てかけてありました。これは誰のいたずらかと不思議に思い近寄ってよく見ると、それは松の木ではなく大きな蛇でした。蛇はあまの窓から首を入れて二階に飼っているたくさんの蚕を舐めていたのです。(当時は蚕は蛇の息を受けると腐ると言われていました)驚いた八郎兵衛は手の平で蛇の背中を叩いてみましたが一向に動じる様子もなく、手に持っていたクワで背中をたたくと、蛇が八郎兵衛の方に振り返って白い霧のようなものを口から吐きました。八郎兵衛はそれを避け、クワを大蛇に口に打ち込み声を限りに助けをもとめました。一足先に家に帰って主人の帰りを待っていた下男8人が驚いて外に飛び出てきました。何と、主人と大蛇が闘っているではありませんか。下男たちは手に手にクワ、カマ、棒などを持ち出し、力を合わせて闘い、とうとう大蛇を撲殺することができました。

その後皆は朝食を済ませ、死んだ大蛇を下の方の山田川へ持ち運び割木を積んで焼却しました。火をつける前に下男が計った大蛇の大きさは長さ一丈九尺八寸(6m)、胴まわり二升樽(直径20cm)もありました。翌朝下男たちがその焼跡を調べてみると、頭の部分は焼けて胴の部分が残っており、そこには昨日見えなかった蛇の手足が出ていました。如何に化けものであったかが伺えます。

このことはすぐに近在の町村に知れ渡り、見物人が絶えませんでした。又、この大蛇退治をした八郎兵衛は近隣数ヶ村の役前を勤めており、富山へ出向くことも多くありました。事件から8日目に藩の御用で富山へ出向いたところ、すでに大蛇退治のことが藩主（十代藩主前田利幹公）の耳に達しておりました。藩主に呼ばれたはこの事実の模様を詳細に述べました。話に満足された藩主は八郎兵衛に、次に富山へ出向いた時は必ず自分の家に来るようにと申されました。

八郎兵衛が次に殿の家に寄ったところ、先日話した大蛇退治の模様を墨絵二本に表しておられました。そしてそのうちの一本を八郎兵衛が賜り家に持ち帰りました。田中家ではその後代々この絵を作物の神として祀って大切に保存されております。残りの一本の墨絵は色が付けられ、今もなお東京の前田家に保存されております。（山田村郷土史より）

※孝子八郎兵衛の顕彰碑 明治22年（1893）6月

富山県知事藤島正健が親子二代にわたる善行に感嘆し、顕彰碑の建立を進める。

【終わりに】

「鎌倉」という地名には、どことなく心を癒してくれるような懐かしい響きを感じます。私たちは当地「鎌倉」を永遠の故郷として大事にしていきたいと考えます。その為にも、当地区が寂れていかないよう常に意識し、そして情宣に努めてまいります。今後とも「鎌倉」を忘れずに応援してください。